

シゴトビト

SHIGOTO-BITO

整えて創る 理想の音色

道具は計10kg超

ピアノ調律師の仕事は、ピアノの音程を合わせるだけではない。鍵盤やピアノ内部の音を出すための「アクション」と呼ばれる部分を、目や指先を使って微調整し、音の雰囲気にはらつきがないように音色をそろえ、それぞれの鍵盤を指で押したときの感覚も同じにする。切れた弦の張り替えなど、壊れたり摩耗したりした部分の修理も手がける。

竹内さんは、コンサートホールや学校、家庭にあるグランドピアノとアップライトピアノの調律を、年間400台前後手がける。仕事に使う「チューニングハンマー」は、約90kgもの力がかかって張られている弦が巻き付いているピンを回すためのものだ。その他、竹内さんは計10kg以上の「七つ道具」を持って依頼元に向かう。

調律師に必要なのは、まず「粘り強さ」。依頼者が訴える雑音や求め

る音がどのようなものなのか、丁寧に耳を傾ける。納得してもらえるまで調整を続け、「今日は家に帰れないんじゃないか」と思うことが何回もありました。サービス業という意識も大切だ。「自分がよいと思う音を優先してはいけない。お客さんが音に納得し、喜んでくれるのが理想です」

最近ではインターネットで演奏動画を配信したり、ストリートピアノを楽しんだりする人が増えている。ピアノを愛する弾き手、そして聴き手も確実に育つ中、「調律師は収入を得る仕事である以上に、やりがいがあるライフワークみたいなもの」と話す。調律したピアノを早速弾いてくれ、その音に耳を澄ませるときが、「何よりうれしい」とほほ笑んだ。



ピアノ調律師

たけ うち じゅん
竹内淳さん(45歳)

HISTORY

- 1976年 岡山県和気町で生まれる
- 1995年 岡山県立岡山城東高校卒業
- 1999年 岡山大学文学部卒業
- 2002年 国立音楽院ピアノ調律科卒業
三室ピアノ調律所(現・ピアノセンター)入社
- 2005年 日本ピアノ調律師協会に入会
- 2014年 ピアノ調律技能士1級取得

母校で後輩の指導も

5歳ぐらいからピアノを習い始めたが、音楽の道に進むつもりはなく、大学の文学部に進学した。しかし就職活動は行わず、「何をしてお金をもらうか、わかりやすい仕事をしたい」と、大学を卒業して1年後に調律師になれる音楽専門学校に入った。

卒業後は調律師を派遣する調律所に所属して経験を積んだ。今はフリーに近い立場で、給料は歩合制だという。現在は、母校の音楽専門学校で講師として後進の指導にも携わっている。「たくさん現場で、依頼者の要望に応える引き出しを増やすのが大切」と話している。

◆ 竹内さんの1日

- 8:15 自宅を出て依頼があった小学校へ
- 10:00 音楽室のグランドピアノと体育館のアップライトピアノを調律
- 13:30 移動の途中で昼食
- 15:00 個人宅でアップライトピアノを調律
- 18:00 帰宅途中で、調律する時期が来た顧客に調律を案内する電話
- 20:30 帰宅

Q. ピアノ調律師になるのに資格は必要?

A. 不要だが、技能を保証する資格がある

ピアノメーカーなどの調律師養成機関や音楽専門学校のピアノ調律科などで学べば、技能や知識を身に付けられる。2011年からは、厚生労働大臣が認定する「ピアノ調律技能士」を名乗れる検定試験も始まった。



Q. 絶対音感があった方がいい?

A. なくてもよい

下から49番目の「ラ」の高さの音が鳴る音叉という道具で基本の音を合わせるのが調律のスタート。絶対音感がなくても調律はできる。ピアノも弾けなくてもよい。調律後、音を確かめるために、演奏する調律師も、しない調律師もいるという。



Q. ありがちな失敗は?

A. 依頼者とのコミュニケーション不足

音色に関わる作業は、弦をたたくハンマーの先のフェルトを整えるために削ったり、弾力性をつけるため針を刺したりする「元に戻せない」作業であるため、依頼者から「前の音の方がよかった」と言われてしまうこともある。音は目に見えない分、依頼者に繰り返し感想を聞きながら慎重に進める。



深く知るには

A DEEPER LOOK



変わり者で口の悪いピアノ調律師が主人公の漫画。「この作品が好きじゃないという調律師もいますが、技術もあり、調律への思いも感じられる主人公に、自分もがんばろうという気持ちになります」